

2021 年度第 1 回研究会（通算第 3 回目）

「イジャーズがつなぐ年・人・学知」

共催：

学術変革領域研究(A)「デジタルヒューマニティーズ的手法によるコネクティビティ分析」(研究代表者：熊倉和歌子 課題番号：20H05830); 学術変革領域研究(A)公募研究「前近代アラビア語史料のデジタル解析による文民エリートの人的ネクサス研究」(研究代表者：太田(塚田) 絵里奈, 課題番号: 21H05374)

本研究会は、ムスリム社会における学問修了証であるイジャーズに着目して、イジャーズの取得にかかわる人々の関係を検証することを目的として企画された。

一般的に、イジャーズは、師が自らのもつて学問を修得した弟子に対して授与するものである。それゆえに、師と弟子の関係は直接的な師弟関係としてとらえられてきた。本研究課題において、こうした師弟関係を可視化分析するためにテキストのマークアップを進めていたところ、必ずしもこの形に当てはまらないイジャーズがあることがわかってきた。それは、面識のない「師」に対して発給を依頼することにより得られるイジャーズである。こうしたイジャーズの取得においては、イジャーズを得ようとする人物と、「師」の間を取り持つ仲介者が存在し、言わば仲介者が持つコネクティビティによって、「師」から依頼者に対してイジャーズが授与される。この場合の師弟関係は、対面での知識の伝授を伴わないものである。また、しばしば、そうしたイジャーズは一人に対してではなく、一度に複数人に対して授与される傾向がある。「師」—仲介者—「弟子」という関係性を可視化分析するためには、このようなイジャーズをどのように位置づけるべきか、また、テキストからどのような情報をひろう必要があるのかについて検討する必要がある。

そこで、本研究会では、特異なイジャーズに注目する 2 人の若手研究者を招き、異なる時代と地域における特異なイジャーズの事例を出し合い、その特長を整理した。第 1 報告「都市を飛び交う集団イジャーズ：13-14 世紀バグダードを中心に」では、水上遼氏が、人名録史料を主史料として、13~14 世紀のバグダードの名士たちと諸都市の学者たちのあいだでやりとりされる「集団イジャーズ」の事例を多数紹介した。「集団イジャーズ」は、高名な学者から名士の子弟らなどに対して授与されたイジャーズであり、イジャーズをもらう側から、イジャーズ請求に応じる形で出されたと考えられる。また、両者をつなぐ仲介者の存在も確認される。こうしたイジャーズは、当時広範かつ日常的に見られたものであると推察した。

第 2 報告「イステイドゥアーのイジャーズ授受を通じた都市エリート間の関係構築：15 世紀名士伝記集『輝く光』を中心に」では、太田(塚田) 絵里奈氏が、15 世紀の伝記集に多数見られる「イステイドゥアーのイジャーズ」について紹介した。これも、水上氏が論じた「集団イジャーズ」と同じような特長を持つイジャーズであり、イジャーズを与える側と

受け取る側のあいだでの知識の伝達は名目的であると推察した。加えて、太田氏は、このようなイジャーザを介した人と人との関係性を可視化分析する方法についても検討を加え、RDF（Resource Description Framework）による可視化例なども紹介した。

この2つの報告に対し、コメンテーターの三浦徹氏は、「イステイドゥアーのイジャーザ」の写本が存在することを紹介し、会場を驚かせた。また同氏からは、伝記集（人名録）をどう読むか、また、マテリアルとしてのイジャーザがどのように残り、それがどのように利用されていたのかについての示唆的なコメントを得た。

その後のディスカッションでは、「集団イジャーザ」および「イステイドゥアーのイジャーザ」の実態を掘り下げる質問が活発になされ、このディスカッション自体が参加者とともにイジャーザの類型を整理するよい機会となった。

以上が研究会の概要であるが、本研究会を経て、「集団イジャーザ」や「イステイドゥアーのイジャーザ」と呼ぶものの輪郭がだいぶ見えてきたといってよい。また、これらの特異なイジャーザに関する情報をひろうだけでなく、いわゆる普通のイジャーザに関する情報をひろい、可視化し、比較することで、より特異なイジャーザの実態に迫ることができるという発見も得られた。

文責：熊倉 和歌子